対馬歴史民俗資料館報

第15号
平成4年3月

編集・発行
長崎県立対馬歴史民俗資料館
対馬厳原町今屋敷
郵便番号 817
電 (09205)－2－3687
印刷所
長崎市栄町6－23
昭和堂印刷
電 (0958)21－1234

館長あいさつ

対馬歴史民俗資料館長　永松成敏

本館が開館して、十三年経過いたします。近年、雨森芳洲先生、朝鮮通信使と脚光を浴びている対馬。

本年度は特に、研究者や歴史に関心の深い方々が、島内外は勿論、韓国を主とした海外からの当館御利用が急増し、国際色豊かな応待に、研究員も資料の収集・整理や研究・展示にと多忙をきわめています。又多くの方々の御配慮で、数多くの貴重な寄贈品も収蔵させていただいております。改めて、御協力・御援助に厚くお礼申し上げます。

さて、上見坂公園に建立されている一つの句碑に「踏青や　海峡二つ見下ろしに」（一杏子）があります。海峡二つとは、勿論対馬と朝鮮の両海峡で、歴史は変わっても位置は変わりません。対馬は、まさに海に介した、古来、広い範囲の交易活動の「アジアと日本」を結ぶ、貴重な架け橋であったことが確認できます。

峰町の佐賀貝塚で、沖縄近海に住む巨大なホシキヌタ貝の下げ飾りや、朝鮮半島に生息するキバノロの牙が出土、又上対馬町の塔の首遺跡と、美津島町のかがり松鼻遺跡等で、朝鮮半島の土器・中国の剣の柄飾りが出土されております。この事実が示すように、島内に点在する縄文・弥生時代の遺跡より、古代から大陸との関わりが深く、その文化の窓口が対馬でありました。

江戸時代を通じ、日朝間にあって、約二七〇年間の外交・貿易の宗家が残した記録（宗家文書）がありますが、内容は質・量ともに一級品といわれる約三万点もの史料が、対馬の貴重な遺産として、当館でお預りしております。また、対馬と朝鮮との交流関係を示す対馬ならではの作品「朝鮮国通信使絵巻」「草梁和館絵図」等の資料も展示・保管しております。

当館といたしましては、今後とも所期の目的を達成すべく鋭意努力し、これら郷土の貴重な資料を大切に保存し、広く一般に公開展示すると共に、学術の振興・文化の進展に寄与するための研究を続けて参ります。

今後とも、多くの方々に御来館いただき、郷土対馬の長い歴史の重みと、豊かな郷土文化を理解していただきたいと願っております。

対馬歴史民俗資料館

近世の対馬捕鯨雑話

日野義彦

対馬海峡の東西の両水道は、通鯨の海峡として有名であった。「西海の方言に上鯨（のぼりくじら）・下鯨（くだりくじら）というあり。冬天に北海の寒気を避て南海にうつるを下鯨といい、春暖の時に随ひ、北海にうつるを上鯨といへり。」（勇魚取絵詞）とある。対馬は下り・上りの鯨を捕る五島・平戸・肥前・壱岐と共に、西海捕鯨の基地であった。

弓取法の捕鯨時代は別として、銛（もり）を鯨に投げて突き取り、引き上げて陸上の納屋で処理する突取法の捕鯨法がある。突取法の捕鯨業時代は、元亀・慶長年間からで、紀州（和歌山県）太地浦にはじまる。対馬に於ては、本館の宗家文庫の毎日記に、寛永十四（一六三七）年、紀州の鯨つきが来島し、田舎へ鯨船で下り、翌年には対馬の刃刺（羽差）と紀州の刃刺が鯨のことで争ったとある。寛永時代、突取法の捕鯨業が対馬沿岸で島内外の人達で営まれていた。

突取法の銛専用の捕鯨の方法から網と銛併用の網取法の捕鯨業に変るのは、対馬では元禄十一（一六九八）年からで、明治初年迄続く。網取法時代、注目すべきは砲術による捕鯨の試みである。宝暦九（一七五九）年、対馬藩士遠藤恒右衛門は鴨居瀬浦（美津島町）で藩の期待をにない実施したが実用化には至らなかった。

四面環海の資源豊富な対馬藩は漁業区域を設定し、鯨漁・網漁等に対して年中の漁事期間や年限を決め、地元及び島外者・村中等に請け負わせる請浦があった。藩は請浦を免した者から浦運上を徴収した。

鯨漁の請浦は六十人といわれる商人、町人、御国鯨組の町人連中、地元の町人が浦主となり仲に立ち西海各地の鯨組主に仰せ付けられた。請浦とは別に藩営の御手鯨組があった。

藩は請浦の鯨組主に捕鯨海域の境界、その浦の運上、鯨の突き運上等の額を記した御墨付を下付した。御墨付の内容は時代が下るにつけ、項目がふえ、藩主等への進物が加わったりして複雑となった。請浦期間は十ヶ年、七ヶ年、五ヶ年等であった。

鯨組主は請浦の域内に、捕鯨基地の据浦を決め、鯨が回游する十一月中旬から四月下旬の間に、下り鯨の冬組、上り鯨の春組の納屋を置いた。冬・春と引きつづく据浦の納屋もあった。鯨組は据浦に鯨船等を繋留して、納屋で生活し、鯨とりに出漁し、近辺の村人を雇用し、鯨油をつくり、肉、骨等を余すものなく商品化して、主に島外へ移出した。納屋は据浦期間中、数百人の島内・島外の人達であふれた。藩はその間、鯨奉行を派遣して、据浦を取り締った。

据浦の主なのに次の浦々があった。

東海岸　西泊浦（上対馬町）　茂土浦　蘆浦―イカズチ―（美津島町）　大梶浦―ヤブサメ―（厳原町）

西海岸　鰐浦―鰐場―（上対馬町）伊奈浦―モエ―　鹿見浦（上県町）　廻浦（豊玉町）　尾崎浦（美津島町）　上槻浦（厳原町）

突取式の鯨組は地元に小田組・服部組・福山組・佐野組等がをり、島外からは伊藤組（平戸）・布屋組（壱岐）・田嶋組（五島）がいた。網取式では地元に突取式の組の外に、亀谷組等がいた。島外からは、田嶋組の外に深沢組（大村）・益冨組（生月）・土肥組（壱岐）等がいた。対馬の亀谷組は天保期巨利を上げ西国の鯨長者と称された。島外の鯨組の刃刺等は自船できたが、地元の御手鯨組は曲海人（厳原町）が捕鯨し他の鯨組は西海捕鯨各地から雇い入れ、その中で壱岐からが多かった。

捕鯨数は年により変動があり、皆無の据浦もあった。幕末にかけて減ってきた。正徳二（一七一二）年の実績によると、鰐場（田嶋組）二十六本、もえ（田嶋組）二十四本、廻浦（小田組）十七本の合計六十七本とり、内五十一本は運上鯨、十六本は座頭、小鯨の子・数日海没し浮上の油のない鯨の運上免の鯨であった。当時鯨数は頭とよばず本でよんだ。鯨の中で、背美鯨が一番多く捕られた。背美鯨は泳ぎが遅く、脂肪に富むので死後沈まない利点があった。

対馬藩にとって、捕鯨業の運上は貴重な財源であった。浦運上の先納、臨時出費の場合は突運上を前借等した。随って藩は請浦を返上したり、請浦期限内に据浦をやめて空浦にならないよう苦慮した。空浦の理由には鯨組主の資金不足、回游鯨の減少、捕鯨技術の拙劣等がある。その外に据浦の位置も影響した。風のよく当る浦で鯨船等の船出が容易でなく、また前後の据浦にはさまれ、回遊の鯨を先き取りされる等であった。

捕鯨数の多寡は鯨組の盛衰に響き、

また「鯨一頭七浦賑う」といはれ、捕鯨業の消長は対馬の活性化に関わるマニュファクチャー（工場制手工業）であった。据浦の沖に鯨が見え、捕れだすと静かだった浦は賑わいだす。据浦の村や近辺の農民は納屋へ銀拵（ぎんかせぎ）の日雇に行く傍ら薪を納屋に売って藩に納める公役銀や生活費に充てた。また村の大人・子供は鯨処理の納屋にだまって入り、庖丁で鯨肉を切り取り家に持ち帰ったりした。この風習を「カンダラ」といった。

下り鯨・上り鯨の回游の頃、対馬の村人達は東西の海面の注視を怠らなかった。傷ついた鯨・流れ鯨を発見すると、村人は舟を漕ぎ出し、曳いてきて浜に上げた。この寄鯨（よりくじら）を藩に届け、藩士がその村に赴き見分の上入札をする。藩は落札高から諸雑費を差引き、残額の三分の一を引き上げた村に交付した。寄鯨は村にとって素晴らしい海の恵みであった。

然し鯨船から鯨を追い込む際、舷側を叩く音のせいで鰯が沖へ逃げて、沿岸の浦内に入らなくなり、また鯨処理の際、流出の油が磯を汚染して、海藻の生長をはばみ周辺の村の農民を悩ました。或る据浦の村では鯨船の宿が村内に在り、風紀が乱れて、あそびが多くなり、農事を怠る者がでてきた。藩はその郷の奉役の申立てを聞き、村外れに鯨船の者の納屋を建てさせ、相互の立入りを禁じた。

寛政九（一七九七）年頃から、異様な船が対馬海峡の両水道に出没しだし、幕末にかけ多くなってきた。その中に米国の捕鯨船がいた。

太平洋を薪積船で漂流中、米国の捕鯨船に救助された者に、三河国（愛知県）の岩吉（六十）・善吉（三十五）がいた。二人は一旦ハワイに連行され、ハワイを基地に、日本海域に出漁の捕鯨船の六十艘中の一隻に乗せられ、朝鮮海峡で操業中、朝鮮国東萊府竜塘浦に給水寄港の折、日本の出先対馬藩の釜山倭館（倭館）に引き渡された。遭難後、三年振りの嘉永六（一八五三）年のことである。調書に米国捕鯨船について興味深い申し立てが記されている。

旗をあげないこの帆船は、船長凡弐拾五間、幅五間、深さ一丈四・五尺で、檣は三本たて、三拾尋の帆を張っている。乗組者の総数四十一人、内女は壱人、子供は二人、これは船長の妻子で、鍛冶屋壱人、桶屋三人、大工壱人もいた。武器は鉄砲十五挺程、大筒一挺、伝馬（ボート）六艘積んでいる。

鯨を捕る方法は「鯨の塩吹き候を見候て、檣の上えあがり、遠目鏡で以て尚又見届け、夫より伝馬五艘程一同に卸し、此伝馬に車様のものを仕掛け居り、射程場所遠之所迄も速やかに押し寄せ、もり様の者を以て突き、終に本船え引き付け、夫より赤身等は直に切捨て、油用の所のみ本船え取り上げ、夫々油に出来し申候……鯨数凡弐拾五本も取り候得ば、ヲフウ（注ハワイ）迄罷り帰り候哉に相見え申候、尤此船は土台メレケ（注米国）と申す所の船の様子に御座候処、右ヲフウ迄参り、夫より又別船を以て油のみを積せ遣し、此船は又々漁事に出候由、兎角日本近くならでは鯨至て寡くよしに御座候。」

（読み下し文　宗家文庫）

二人の乗っていた米国捕鯨船は弘化三（一八四六）年発明の銛と併用のボンブランス（爆弾鎗）は使用していないようである。

近世末、日本海域に進出の米国捕鯨船は新式の捕鯨法で鯨をとり、船上で鯨油を製した。この米国捕鯨業は日本近海の鯨を乱獲し、日本古来の網取法を圧倒すると共に、陸上の納屋で鯨の解体処理の捕鯨業を没落に追い込んだ。西海捕鯨の各地の鯨場と同様に、対馬海辺の据浦のマニュファクチャーはさびれてゆき、近代を迎える。

豆酘（つつ）の『ハギトウジン』

大畠　精一

「ハギトウジン」、この不思議な言葉が指すのは、パッチワーク風の着物である。

小布を継いで作る点や、名称など民俗学の研究の対象にもなっている珍しい着物であり、特に対馬では、筒袖をトウジン袖といい仕事着に広く着用され「ヤマギモン」「ヤマイキギモン」とも呼ばれていた筒袖の「トウジンギモン」の中の、対馬南端・豆酘での仕事着で大変ユニークなものである。（本館収蔵の展示品）

「ツギハギトウジン」というわけであるが、もともと「フセカケギモ

ン」といい、対馬では耕地が乏しく、食糧の生産が優先し、綿を大量に作ることはなし得ず、麻の生産が主になり、木綿は入手しにくかったので、四～五枚程度の布をはぎあわせ、袷の裏は残り布や古布を使ってのリフォームだったものが、大正のはじめ頃から、反物の端を切り落した端切れを入手するようになると、これを小さく方形に切り分け組み合せながら作っていた。

昭和に入り、十三年頃からは、「カライウリ」と呼ばれる行商人が、久留米絣を持って売り歩くようになり、小切れで買い求め、四十枚以上の布を継ぎ合わせたりしたが、伝統的なものは、紺無地・縞・絣（大・中・小の柄別）の配置が、きっちりと決まり柄が連続しないように十二～十三種類を使うほか、すべて別柄でもつくる場合もある。

（図1）（図2）により各生地の配置、その他特徴等についての概略を説明してみることにする。

ハギトウジンの豆酘美人と対州馬

後ろ見頃の背縫い左側の（こぶせ）は絣。下に縞、次は絣の中または大柄、紺無地、絣の順で、右側は同じ絣の（こぶせ）から絣の中または大柄、紺無地、絣、縞と続き、接ぎ合わせをずらせた段違いの柄使いになっていて、後ろ身両脇は、全部絣の大・中・小柄を縦も横も比対称に配している。

前身は、（肩ふせ）と襟先下の（おくみ）は紺無地で、他は絣の柄違いとし、（大袖）（ひうち）（せご）もそれぞれ絣で（ささき）が紺無地となっている。襟は絣を使い、四ツ身縫いで仕立て、縫い代は裏に出ている。肩、袖口、おくみ、裾などの汚れやすい箇所は紺無地になっていて、それがデザイン的に効果があるのも見のがせない。

パッチワークの原形といえる素朴なパターンながら、なかなかのもので、今々の鑑賞用とはちとワケがちがうように思える。

着る人のサイズで着丈、身幅、裄で加減するが、対丈なのは働くのに不便そうで気になるが、漁村に多い「ドンザ」の感覚も含まれているのだろうか。そうだとすると地域性を現しているようにも思える。

働きやすく、防傷、防虫、防寒等のためか袖口が細くなっていて、その上から手甲を付けるが、動きがいいように、袖付けを広めにしてあり、その上更に肘の部分に運動量として、ゆとりを持たせてある。袖口まちの（ひうち）と袖底になる（せご）の縫合わせ方だけで自然にそのように出来上がる袖は、他に類を見ないもので、だれが考えたものか、すばらしいの一語につきる。

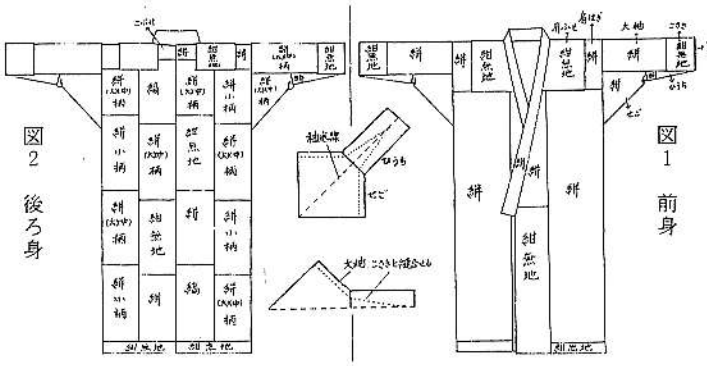

図1　前身

図2　後ろ身

「ハギトウジン」を着る時のことについても少し述べておきたい。

着方がなかなかしゃれていて、中に着る胸当ては、木綿かメリヤスの白で、細い巾のハイネックのもの。帯は、えび茶などの手絞りの扱（しごき）を締め、紺の手甲の紐は白である。足には、膝下までの黒の靴下に地下足袋をはき、白の前掛けでピシッと決める。靴下以外は、すべて手作りだったということである。

経済性と機能性を主とする労働着に、これだけの装創性がとりいれられているのは豆酘の人々の感性と暮しの豊かさが現れているように思えてならない。その上伝説と結び付けて、話題性も加わっている。

「ハギトウジン」について語る時には必ずといってよい位に引き合いに出される悲しい物語があり、その伝説を紹介して、結末としたい。

「昔、昔、豆酘の里に鶴王という賢くてとても美しく、その上に孝行心の深い娘がいて、里中の評判娘でした。その評判は、他の村々までも

聞こえていきました。やがてその噂は、都までもとどき采女として殿中に召されることになりました。年老いた母を一人残して行けないと許しを請うたのですが、どうしても聞きいれられず、ひどく悲しみながら迎えの駕籠で旅立ちました。駕籠は、トンモト山[註1]のゆるい尾根道を峠の方へすすんでいきます。鶴王は、どうしても堪らなくなり、豆酘の里が見えなくなった村[註2]はずれで、舌を噛切って息たえだえに、美しく生れたばかりに、このような悲しい思いをしなければならない、どうかこれから豆酘には美人が生れませんように、といい残して息をひきとったということです。里の人々はたいへん悲しみ、可哀そうな鶴王をその場所[註3]に葬むり碑を建てて美女塚とよぶようになったと語りつがれ、美人の多いといわれるこの地の娘達はその後、美貌を隠すためにわざと継ぎ剝ぎの着物を着るようになったということです。」

つまり、ハギトウジンは、身を守ための着物だったとその由来を説明しているのである。

・註1　美女塚のある土地を豆酘で俗にトンモト山という。
・註2　豆酘の保床山の北斜面。
・註3　現在も伝説と同じ場所に新たな美女塚が建立されている。

本館架蔵の清水山城絵図について

三浦忠和

本館架蔵の歴史資料の一つに、清水山城図（宗家文庫所蔵本）がある。この城址は中世風の山城で、その構造をよく遺し、しかも後世の修補がないことで貴重な遺跡として、国指定の史跡となっている。

今から凡そ四百年前、全国統一を果した豊臣秀吉は、朝鮮半島から中国大陸をも侵略しようとして、「文禄・慶長の役」をおこし、双方の歴史に深い爪痕を残した。

このとき、豊臣秀吉は配下の諸大名に命じ、出兵基地として松浦の地に名護屋城を、また全国の諸大名は、それぞれの陣屋をこの松浦の地に築いた。そして、前線の兵站・軍事拠点としての壱岐勝本城・対馬の清水山城・豊崎郷撃方山の城砦、更に韓国南部にまで多くの日本式「倭城」など構築した。

かつては、朝鮮との通交が生命線であった対馬としては、朝鮮との戦争を回避するために、島主宗義智は懸命の努力をしたが、結局実を結ぶことなく、はては一転して出兵の兵站基地となってしまった。このため島内には重い課役がかけられ、舟や人の調達がなされ、武士をはじめ多くの人々が従軍した。結果は、慶長三年の秀吉の死をもって、全軍が撤兵し戦争も終った。

一ノ丸石垣跡

この戦争が地元の村人のくらしに、どのような影響を与えたか、村に残る古文書（豊崎御郡中之覚）に、次のように記述されている。

「朝鮮陣で、戦死したり、にけはしり（逃散）したりしたので、前代は、村々に多く人数がいたのが、大部分がいなくなってしまった。そのため、年貢、公事を納める公役人が減ったので、藩からの課役も減免された。」

―上対馬町誌より―

このように、清水山城などの遺構は、その時代のひとつの歴史を物語っているのである。

当時の築城にかかわる記録として、「津島紀事」（文化六年平山東山著）には、次のように記述されている。

在于府西清水山天正十九年辛卯
豊臣公命築　不傳圖築者之名恐是
毛利高政之所圖也
此出兵於朝鮮之日欲有動座也
城郭曰一ノ丸曰二ノ丸曰三ノ丸
（中略）
兩朝平壌録云萬暦十八年關白
令列國築城於肥前一岐對馬三處
以為渡唐館驛即指肥前名護屋城
壹岐勝本城對馬清水山城也。

この「津島紀事」に記述された、清水山城址現場での概観は、次のとおりである。

「天正十九年（一五九一）、築城されたと言われるこの独立状の丘陵清水山は、馬背状を呈し、その稜線上に頂上から本丸、中間の段に二ノ丸、東の端に三ノ丸と、地形に即して階段状につくられており、全長約五〇〇米の石垣がよく遺っている中世風の山城である。」

さらに、専門的な説明を引用すれば、「標高二〇六米の一ノ丸は、東西約五〇米、南北約四〇米の長方形角丸で、中央に矢倉の基壇がある。東西正面には、門址と桝形があり、西側搦手にも門址があり、山道に通じている。二ノ丸は小さく矢倉がない。三ノ丸は全形が把握し難いが、石垣の出張、門址、石段が遺っている。」――「長崎県の文化財」より――

このように、規模は大きくはないが、文禄・慶長の役の遺跡として、遺例が乏しいと言われるだけに、城跡としての価値は高いと言わざるを得ない。

最後に、清水山城跡から見渡した景観など述べて終りにしたい。

先づ、有明連峰を背にして一ノ丸の城址に立ち、視界を東の対馬海峡から北に転ずると、浅茅湾の島々や大山嶽、さらには上県の連山を一望できる。そして、きびすをかえし二ノ丸を過ぎるころ、途中の鞍部より金石城趾に下る山道がある。その途中に、図面にも表記されている「清水の湧き出る泉」を見つけることができる。これが「清水山」の名の由来らしい。ここに井戸を設けて、城中の水としたと言う。

また、二ノ丸の南麓からも、宗家十万石の金石城趾が見える。尾根の突端の三ノ丸からは、宗家の城下であった厳原の町――文化八年、幕府の上使が対馬で朝鮮通信使と最後の国書交換（対馬聘礼）をした城下町――それをとり囲むように、厳原港や後山の山並が一望できる。更に壱岐、博多を臨めば、玄海の大海原が広がり、清水山城を中心に、一大パノラマを呈する景勝の地である。

一ノ丸から厳原港を望む

資料寄贈者一覧

（受付順・敬称略）

平成三年度当館へ資料のご寄贈をいただいた方をご紹介いたします。ありがとうございました。

○民俗資料〈コッパラ他十三点〉
・長沢利明＝東京都杉並区堀ノ内
○民俗資料〈置ランプ他二点〉
歴史資料〈ぱだらい他二点〉
・薦田初子＝福岡市早良区昭代
○民俗資料〈水盃二点〉
歴史資料〈瓦一点〉
・中田正人＝対馬厳原町国分
○古文書〈上棟式伝授之巻物他一点〉
・根占　勝＝対馬厳原町田渕
○古文書〈刊本他四十一冊〉
・副島道大＝対馬厳原町田渕

平成三年度職員一覧

館長	永松	成敏
総務課長	城谷	豊実
指導主事	白水	志芳
研究員	日野	義彦
同	大畠	精一
同	三浦	忠和